

「十二使徒の名前（二）」

マルコの福音書 3:18~19

はじめに

イエシュアの十二使徒の名前に秘められたメッセージを読み解く試み、今日はその第二回目となります。今回はシモン・ペテロ、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネの三人について述べましたが、今日は残りの九人を取りあげます。神のご計画に偶然はありません。聖書に記されたすべてが必然であり、何等かの意味を持つのです。この観点、信仰に立ちながら今日も読み進んでみたいと思います。

【新改訳 2017】 マルコの福音書

3:16 こうしてイエスは十二人を任命された。シモンにはペテロという名をつけ、

3:17 ゼベダイの子ヤコブと、ヤコブの兄弟ヨハネ、この二人にはボアネルゲ、すなわち、雷の子という名をつけられた。

3:18 さらに、アンデレ、ピリポ、バルトロマイ、マタイ、トマス、アルパヨの子ヤコブ、タダイ、熱心党のシモン、

3:19 イスカリオテのユダを任命された。このユダがイエスを裏切ったのである。

1. アンデレ

「アンデレ」とはギリシャ語で「男らしい」という意味だというのが通説です。彼はペテロ（ヘブル語ではケファ）と呼ばれたシモンの弟として知られています。ここに一つの疑問が生じるのですが、兄のシモン（旧約聖書ではシメオン）という名が「聞く」という意味のシャーマ(שמע)というヘブル語が由来であるのに対し、なぜ弟である「アンデレ」はギリシャ語の名前なのかということです。「アンデレ」にはヘブル語を語源とする別名があったという説を唱える人もいますが、しかしそれが何であるのかは不明で、何より聖書には彼の名としてはこの「アンデレ」というギリシャ語名の他には記されていません。ですからこの名からヘブル的な意味を導き出すことはできませんが、神のご計画という視点においては重要なメッセージを受け取ることができます。それはイスラエル、ユダヤ人の名とともに、その兄弟として、異邦人の名が加えられ、並べられているということです。神の選びの民としてのイスラエルとは、アブラハムの子孫という血のつながりを持った人々だけを指すのではなく、異邦人であったとしても、イスラエルの神である主を自分の神とし、この御方だけに聞き従うならば、それはイスラエルの同胞、同族と見なされ、神の所有の民としての地位が与えられるということが、この「アンデレ」という名が記されている事実を表されたメッセージであると考えられます。しかもそれは彼の名だけにとどまらず、続く「ピリポ」の名にも同様の事実が表されていると考えられます。

2. ピリポ

「ピリポ」、この名もまたギリシャ語名です。一説によるとギリシャ語で「愛する」を意味するフィレオー(φιλέω)と「馬」を意味するヒッポス(ἵππος)が合わさったもので「馬を愛する者」という意味が

あるそうです。彼についても聖書に記された名はこれのみです。「アンデレ」、そしてこの「ピリポ」、ギリシャ語名が連続して記されたこの事実は、イスラエルの民に繋がる異邦人に対する神のご計画が繰り返しのよって強調されていると考えられます。神は決してイスラエルだけを選んでおられるわけではないのです。神のご計画はイスラエルだけを祝福するものではありません。イスラエルによって地上のすべての民族を祝福する計画なのです（創世記 12:3）。

3. バルトロマイ

続いて記されている名はこの「バルトロマイ(בַּרְתוּלַמַּי)」です。一見ギリシャ語名にも見えますが「子、息子、子孫」を意味するヘブル語バル(בַּר)が頭についた「トロマイの子」という意味のヘブル語名です。「トロマイ」というのはおそらく彼の父親の名だと思われ、旧約聖書では「タルマイ」と表記されており、同名別人がいくつか存在します。

【新改訳 2017】民数記

13:17 モーセは、カナンの地の偵察のために彼らを遣わして言った。「向こうに上って行ってネゲブに入り、山地に行き、

13:18 その地がどんなであるか、調べてきなさい…

13:22 彼らは上って行ってネゲブに入り、ヘブロンまで行った。そこにはアナクの子孫であるアヒマンと、シェシャイと、タルマイがいた。

これはモーセの時代、エジプトを脱出したイスラエルの民が約束の地カナンに入る前に偵察を遣わした場面ですが、ここにカナンの先住民として「タルマイ」の名が記されています。しかしイスラエルのカナン侵攻によって彼らは土地を追われることとなります。

【新改訳 2017】ヨシュア記

15:13 ヨシュアは自分への【主】の命により、エフネの子カレブに、ユダ族の中でキルヤテ・アルバ、すなわちヘブロンを割り当て地として与えた。アルバはアナクの父である。

15:14 カレブはそこからアナクの三人の息子、シェシャイ、アヒマン、タルマイを追い払った。これらはアナクの子である。

また興味深い事実に、旧約聖書にも一人「バルトロマイ」すなわち「トロマイ（タルマイ）の子」が存在します。それはイスラエルの王ダビデの三男アブサロムです。彼はダビデとその妻の一人であるマアカとの間に生まれた子ですが、彼の母マアカがゲシュルの王「タルマイ」の娘なのです（サムエル記 II 3:3）。つまり正確にはアブサロムはこの「タルマイ」の孫になるのですが、イスラエルには孫、または祖父というような呼び方はなく、「アブラハムの子イサクの子ヤコブ」というように言い表すため、アブサロムはダビデの子ですが「タルマイの子」すなわち「バルトロマイ」とも呼べるわけです。またこのアブサロムは大きな罪を犯しました。兄でありダビデの長男であったアムノンを殺し、ダビデのもと

から身も心も離れ、ゲシュル人の地、「タルマイ」のもとに身を寄せていたことが記されています。(サムエル記Ⅱ 13:37) そしてついにはダビデからその王位を奪おうとさえしたのです。

これらの事実から、「バルトロマイ」という名にはカナン¹の地、すなわちイスラエルの国から追い出されること、またはその存在が指し示されていると考えられます。それはイスラエルの神を神とせず、異教の神々に従う者たち、また「アブサロム」の行いに表されているように、ダビデの長子を殺すこと、これは「ダビデの子」とも呼ばれるメシアであるイエシュアに対する反逆を指し示す行為と考えられます。このような者はイスラエル、すなわち「神の国」から追い出される、決して入ることはできないことが指し示されていると考えられます。イスラエルによって地上²のすべての民族、異邦人が祝福されることが「神の国」の計画であるわけですから、この祝福の中から追い出されるとは、この地上から追い出されること、すなわち滅ぼし尽くされてしまうことを意味すると言えます。

4. マタイ

「マタイ」、この名はヘブル語名で「賜物」という意味の名詞マツタト(מתנת)に由来するようです。この言葉が聖書で最初に使われるのは列王記Ⅰ 13:7 です。

【新改訳 2017】Ⅰ列王記

13:7 王は神の人に言った。「私と一緒に宮殿に来て、食事をして元気をつけてください。あなたに贈り物をしたいのです。」

これは北イスラエルの王ヤロブアムが一人の預言者を食卓に招いたという箇所です。ここに「贈り物」、聖書で最初のマツタトがあります。ですからマツタトとは本来、宮殿で催される王の食卓に招かれることを指し示した言葉であると考えられます。イエシュアはこの「マタイ」を呼ばれた後、彼と食卓をともにしている出来事が記されていることも(マタイ 9:10、マルコ 2:15、ルカ 5:29) この意味とつながりがあると考えられます。このように「マタイ」という名には、王なるイエシュアと食卓をともにするという出来事が表されていると考えられ、これが「神の国」において成就することが指し示されていると考えられます。

またこの「マタイ」についてはもう一つ別の名が記されています。

【新改訳 2017】マタイの福音書

9:9 イエスはそこから進んで行き、マタイという人が収税所に座っているのを見て、「わたしについて来なさい」と言われた。すると、彼は立ち上がってイエスに従った。

【新改訳 2017】マルコの福音書

2:14 イエスは道を通りながら、アルパヨの子レビが収税所に座っているのを見て、「わたしについて来なさい」と言われた。すると、彼は立ち上がってイエスに従った。

このように、彼には「レビ(לֵוִי)」というもう一つ別の名前がありました。これは「伴う、連なる」という意味のヘブル語ラーヴァー(לָוָה)という動詞を由来とする名で、これは本来、夫がその妻に結びつくという意味で使われた言葉です。

【新改訳 2017】創世記

29:34 彼女はまた身ごもって男の子を産み、「今度こそ、夫は私に結びつくでしょう。私が彼に三人の子を産んだのだから」と言った。それゆえ、その子の名はレビと呼ばれた。

これはヤコブすなわちイスラエルの、その妻レアが語った言葉です。「夫は私に結びつくでしょう。」ここに聖書で最初のラーヴァーがあり、これが「レビ」という名の由来であることがわかります。このように、夫と妻の結びつき、つまり結婚の関係を指し示すのがラーヴァーの持つ本来の意味だと考えられます。聖書に記されたイスラエルの歴史の中で、民は多くの偶像礼拝の罪を犯しますが、これを聖書はしばしば「姦淫」と呼んでその罪を言い表しています。これは神がイスラエルと交わした契約、その関係が夫婦の関係と同様のものであるということが前提となっているためです。また私たち異邦人の教会はキリストすなわちメシアの「婚約者」また「花嫁」と呼ばれています（コリントⅡ 11:1）。このように、神はイスラエルと教会をご自分の妻または花嫁のように見ておられるということがこの「マタイ」すなわち「レビ」という名には表されていると考えられます。また十二使徒の名がシモン・ペテロから順番に記され、「マタイ」はその七番目にあるということにも意味があると思われれます。七という数は創世記 1 章に記された神の天地創造の御業の「第七日」に由来した神の安息、そのご計画の完成を表す数であると言えます。つまり神はイスラエルをご自分の妻とし、教会を御子イエシュアの花嫁として、ともに住み、ともに生きるようになることをそのご計画の完成と見ておられるということがこの「マタイ」の名が七番目に記されたことの持つ意味、その理由であると考えられます。

5. トマス

「双子（を生む）」という意味のヘブル語の動詞ターアム(דָּוָם)がその由来であると考えられます。ヨハネの福音書 11:16 など「デドモと呼ばれるトマス」という記述があり、このデドモとは同じく「双子」という意味の彼のギリシャ語名です。ではターアムの最初の言及を見ましょう。

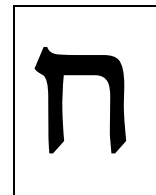
【新改訳 2017】出エジプト記

26:15 この幕屋のために、アカシヤ材で、まっすぐに立てる板を作る。

26:23 幕屋のうしろの両隅のために板二枚を作る。

26:24 これらは底部では別々であるが、上部では、一つの環のところで一つに合わさるようにする。二枚とも、そのようにする。これらが両隅となる。

これは神がモーセに命じてイスラエルに造らせた幕屋についての記述の一部です。幕屋の外壁となる板について「底部では別々であるが」と訳されている箇所¹に聖書で最初のターアムがあります。「別々である」しかし「一つに合わさるようにする」これがこの言葉の持つ本来の意味です。そしてそれによって神の住まわれる家である幕屋が建てられることが指し示されていると考えられます。神と人、イスラエルと異邦人の教会、別々のものが一つに結ばれるのが神の家「神の国」のご計画の完成です。「トマス」という名にはそのような意味が表されていると考えられます。ちなみにこの名は十二使徒の八番目に記された名です。ヘブル文字の八を意味するヘット(ח)には、非常にシンプルですが底部は別々、上部は一つに合わさるといふ様子が見事に表されています。



6. アルパヨの子ヤコブ

「小ヤコブ」とも呼ばれる、十二使徒の二人目のヤコブです。この名の指し示す意味については前回の「ゼベダイの子ヤコブ」についての箇所²で述べたとおりです。彼の父「アルパヨ」という名はギリシャ語名です。父の名はギリシャ語、しかし子はヘブル語名でという、彼について一見奇妙な紹介がなされていますが、これもまたイスラエルと異邦人の教会が結び合わされるという、神のご計画の完成を指し示した名であると考えられます。

7. タダイ

「タダイ(תדי)」という名は注解書によりますと「母の胸」という意味だそうで、そうなりますと「胸、乳房」を意味するダド(דד)がこの名の由来であると考えられます。

【新改訳 2017】箴言

5:1 わが子よ、注意して私の知恵を聞け。私の英知に耳を傾けよ。

...

5:18 あなたの泉を祝福されたものとし、あなたの若いときからの妻と喜び樂しめ。

5:19 愛らしい雌鹿、麗しいかもしか。彼女の乳房がいつもあなたを潤すように。あなたはいつも彼女の愛に酔うがよい。

5:20 わが子よ。どうしてよその女に夢中になり、見知らぬ女の胸を抱くのか。

箴言は神の御言葉を「知恵」という言葉に言い換えて記されている書です。そしてその「知恵」に聞き従うことを、ここでは良好な夫婦関係、性的な交わりにたとえられ「彼女の乳房」まさにタダイ「母の胸」という形で、聖書で最初のダドが使われています。ですからこの「タダイ」という名には、神がその御言葉に聞き従う者と麗しい夫婦のような関わり、交わりを持ってくださることが表されていると考えられ、「神の国」においてそれが完全に成就することが表されていると考えられます。

またこの「タダイ」は、並行記事であるルカの福音書 6:16、また使徒の働き 1:13 から、彼は「ヤコブの子ユダ」という名でもあることがわかります。「ユダ(הַיְהוּדָא)」という名は「感謝する、賛美する」という意味のヘブル語のヤーダー(הָיָדָה)という動詞がその由来です。

【新改訳 2017】創世記

29:35 彼女はさらに身ごもって男の子を産み、「今度は、私は【主】をほめたたえます」と言った。それゆえ、彼女はその子をユダと名づけた。その後、彼女は子を産まなくなった。

これはヤコブすなわちイスラエルの妻レアが四男ユダを産んだ時に語った言葉です。彼女が「【主】をほめたたえます」と言っている箇所には聖書で最初のヤーダーがあります。これが「ユダ」という名の由来であることもこの箇所からわかります。レアは主をほめたたえました。それはどのようにほめたたえたのでしょうか。レアは歌ったとも踊ったともいけにえをささげたと記されていません。主をほめたたえるとは本来、どのような行為を指し示すのでしょうか。ヤーダーのこの最初の言及から考えられることは、「ユダ」という存在を産む行為そのものが、主をほめたたえるということであり、ヤーダー本来の持つ意味であると考えられます。なぜならこの「ユダ」の子孫からイスラエルの王ダビデが生まれ、さらにその王の血筋の中から「ダビデの子」と呼ばれるメシアであるイエシュアがお生まれになるからです。つまりレアが「ユダ」を産まなければ、神のご計画は成就しなかったということです。ですから主をほめたたえることは本来、私たちが捉えているような賛美や礼拝、献げものなどとは比較にならないほどに重要な行為を指し示していると言えるのです。このように、「タダイ」の別称「ユダ」の名には、神のご計画が成就、実現すること、またそれを支える行為すなわち神に用いられることを指し示す意味が込められていると考えられます。

8. 熱心党のシモン

十二使徒の中で二人目の「シモン」、この名に示された意味についても前回の「ペテロと呼ばれたシモン」についての箇所で述べたとおりですが、この「シモン」は「熱心党:ハッカナイ(הַקַּנָּאִים)」という一派に属していたとあります。この一派は当時のユダヤ人の社会を導いていたパリサイ派、サドカイ派などとも並び称されるほどの強力な組織で、その名のとおり彼らの神に対する熱心さは他派よりも強く、神に背く者はたとえローマ帝国でも同胞のユダヤ人でも容赦はせず、時には武力行使によってその主義を主張するというような組織でした。「ねたむ、うらやむ、熱中する」という意味の動詞、カーナー(כָּנָא)がその名の由来であると考えられ、これは本来、アブラハムの子イサクについての出来事を指し示した言葉であることが、その最初の言及からわかります。

【新改訳 2017】創世記

26:12 イサクはその地に種を蒔き、その年に百倍の収穫を見た。【主】は彼を祝福された。

26:13 こうして、この人は富み、ますます栄えて、非常に裕福になった。

26:14 彼が羊の群れや牛の群れ、それに多くのしもべを持つようになったので、ペリシテ人は彼をねたんだ。

ここで「ペリシテ人は彼をねたんだ。」と訳されている箇所には聖書で最初のカーナーがあります。そしてそのねたみは「百倍の収穫」、神である主がイサクを祝福され、彼が「富み、ますます栄えて、非常に裕福になった。」ことを指し示しています。ですからこのカーナーは本来、アブラハムの子イサクの家の繁栄、その子孫であるイスラエルの民の繁栄が指し示された言葉であると考えられ、十二使徒の中にこの「熱心党のシモン」の名が数えられているのは、神のご計画の中にはイスラエルの民の繁栄の祝福が組み込まれていることを表すためであったと考えられます。

9. イスカリオテのユダ

最後に「イスカリオテのユダ」、この名について。「イスカリオテ(אִישׁ קַרְיֹת)」とは「ケリヨテの人」という意味で、彼がケリヨテという町の出身であったことを示す名と考えられます。このケリヨテという名の意味は、「都、町」という意味の名詞キルヤー(קִרְיָה)の複数形で、すなわち「町々」という意味となりますが、さらにこのキルヤーは「出会う、起こる」という意味の動詞、カーラー(קָרָה)がその語源であり、最初の言及は創世記 24:12 です。

【新改訳 2017】 創世記

24:11 彼は夕暮れ時、水を汲む女たちが出て来るころ、町の外の井戸のそばにらくだを伏させた。

24:12 そうして言った。「私の主人アブラハムの神、【主】よ。どうか今日、私のために取り計らい、私の主人アブラハムに恵みを施してください。

これはアブラハムのしもべが祈った祈りの一節です。彼は主人であるアブラハムから、主人の息子イサクの花嫁となる女性を探そう遣わされ、このように祈ったのです。「私のために取り計らい」と訳された箇所には聖書で最初のカーラーがあります。神はこのしもべの祈りに応えられ、リベカを連れて来られます。ですからこのカーラーには本来、花婿のために花嫁を連れて来るという意味があると考えられます。先にも述べたように、「神の国」の完成が、夫婦の結びつき、結婚にたとえられることがここにも再度表されていると考えられ、「イスカリオテ」という名もまた「神の国」の完成とその内実を表したものであると考えられます。

そして「ユダ」という名については先ほど述べたとおり、神のご計画の成就のために用いられることを指し示した名であると考えられます。確かに彼は「イエスを裏切った」存在である悪者、神に敵対するサタンの手先となるという残念な結果を迎えますが、もしもこの「ユダ」がイエシュアを裏切らなかつたら、他の使徒たちと同じように歩んでいたとしたら、一体どうなっていたでしょうか。イエシュアは十字架にかかれることも殺されることもなかったかもしれませんが。しかしそれでは神の御子イエシュアの死、その血潮によってイスラエルとそれに繋がるすべての者の罪が赦されるという神のご計画は成就せず、誰も「神の国」に入ることができなくなってしまっていたことでしょう。ですからある意味でこの「ユダ」は神のご計画の成就のために重要な働きをした、神に用いられた人であると言えます。ですからこの名には、サタンも悪霊も不信者も、神と互角に渡り合えるような存在などではなく、所詮は神の御手の中で、そのご計画の中で使われる手駒のような存在にすぎないほどに、神は偉大な御方で

あるということが表されていると考えられます。このように、「神の国」のご計画の完成のために、神はご自分に敵対する者さえも用いられるというメッセージがこの「イスカリオテのユダ」の名とその存在には表されていると考えられます。

また彼は「イエスを裏切った」とありますが、ここに使われているヘブル語はサーガル(גרגל)という動詞で、本来は「閉じる」という意味で、創世記 2:21 にその最初の言及があります。

【新改訳 2017】創世記

2:21 神である主は、深い眠りを人に下された。それで、人は眠った。主は彼のあばら骨の一つを取り、そのところを肉でふさがれた。

2:22 神である【主】は、人から取ったあばら骨を一人の女に造り上げ、人のところに連れて来られた。

これは最初の人アダムの骨から、その妻エバが造られる場面です。「肉でふさがれた」と訳されているのが聖書で最初のサーガルです。このように、サーガルとは本来、人の「あばら骨の一つを取り、」そしてその妻となる女を「人のところに連れて来」ることを指し示していると考えられます。「イスカリオテのユダ」のサーガル、裏切りによってイエシュアは十字架にかかれ死なれました。しかしそれによって罪の贖いがなされ、イエシュアを信じる者、すなわち私たち教会が花嫁として花婿であるイエシュアのみもとに「連れて来られ」ることになるのです。そのような神のご計画が「このユダがイエスを裏切ったのである。」という記述には表されていると考えられます。

10. 顔と顔を合わせて

イエシュアの十二使徒の名前について見てまいりました。そこには多くの神のご計画が表されていましたが、特に顕著だったのが「二つのものが一つになる」というものであったと思われまます。ユダヤ人である使徒たちの多くがギリシャ人の名が与えられており、また一人の人に二つの名前がある事実なども見られました。そして彼らの名には多くの夫と妻の関係、夫婦像が描かれていました。結びつき、交わり、関わり、神が求めておられるものとはこのようなものであると、改めて感じさせられました。私たちもこの神と、いつの日か顔と顔を合わせて交わるようになることを思い、求め、待ち望みながら、日々を歩んでまいりましょう。聖霊の助けがありますように。